

第6回 那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議

■ 日時

令和2年11月18日（水）15:00～17:00

■ 開催方法

オンライン会議

■ 出席者

有識者委員

- 小場瀬 令二 （筑波大学名誉教授）
- 山 島 哲夫 （宇都宮共和大学副学長）
- 松 岡 拓公雄 （亜細亜大学都市創造学部長）
- 渡 辺 美知太郎（那須塩原市長）

ファシリテーター

- 朝比奈 一郎（那須塩原市経済活性アドバイザー）

■ 議事

（冒頭挨拶）

事務局：

昨年度は那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議を計5回開催し、「那須塩原駅周辺まちづくりに関する報告書」を取りまとめました。今年度は那須塩原駅周辺まちづくりビジョン市民懇談会にて市民から意見を伺い、まちづくりビジョンを策定する予定となっています。今回は昨年度から引き続き第6回目の有識者会議となりますが、有識者の先生方よりまちづくりビジョンに対するご助言を頂きたいと考えています。有識者会議は年度内に3回開催する予定となっています。それでは、初めに渡辺市長よりご挨拶をお願いします。

渡辺市長：

皆さまご無沙汰しております。昨年度は有識者の先生方から様々なアドバイスを頂きましたが、ブリヂストンの黒磯工場の跡地の活用については、財源やハザードマップなど諸々の事情により計画を断念せざるを得なくなりました。新型コロナの影響などにより、来年度からは税収がかなり減ることも予想され、大規模な投資をすぐに行うのは難しいのが現状です。

ただ一方で、那須塩原市に限らず、地方での風向きは変わってきていると感じます。那須

塩原市でも既に多くの観光客に来て頂いておりますが、その他にもワーケーションが普及する中で、那須塩原市でもう1つ会社を作っても構わないという話も来ております。この地方に対する追い風をしっかりと捉えたいと思っております。

加えて、那須塩原市役所では分散勤務の取り組みを行なっておりますが、投票所で使えるような公民館は役所としての機能を果たせるということが分かりました。新庁舎の建設に関しても、大きな箱を一つ作るということもありますが、市役所の機能を幾つか分散させても良いのではないかと考えています。コロナ禍において、テレワークやオンライン会議が普及してきて、今後のまちづくりも1箇所に整備を集中させる必要がなく、いくつかの建物があって、一部に市役所機能が入るなど様々なパターンが考えられます。最近は私の中では分散という言葉がキーワードになっています。まちづくりも含めて新型コロナ前と後では考え方を変えてもいいのではないのでしょうか。

今日は先生方からもコロナ後において、どのように自治体が特色を活かしていけるかご意見を賜りたいと考えています。私自身コロナ後の那須塩原市のあり方に非常に注目しております。自治体としては、直近の新型コロナ対策、中期的な経済支援、コロナ後のまちづくりの3つのファクターが重要となりますが、先生方からこの点についてお知恵を頂きたいと思っております。

事務局：

それでは、これからの司会進行につきましては那須塩原市経済活性アドバイザーを務めている朝比奈氏にお願いします。

(資料説明)

朝比奈氏：

皆さまご無沙汰しております。私事になりますが、今朝は国交省のまちづくり推進課長、ライフルホームズの島原所長、**日本大学経済学部**の中川教授と座談会を行ったのですが、ここではコロナ禍の中で2極化が進んでいるという話になりました。自治体においても、どんどん人に来てほしいという市町村と、新型コロナウイルスが心配なので来ないでくれという市町村とで2極化が進んでいます。どんどん来てくれという市町村は、ワーケーションなどの流れをチャンスであると捉えています。先日は妙高市から東京の会社を5社程度連れきて欲しいと頼まれて、企業を連れて行ったりしました。

国交省においても、大都会での高層マンションでの集中と、風光明媚な場所での集中との2極化が進んでいると議論されています。そのような中では、郊外や地方都市の立場は厳しくなっていくことも想定されます。

それでは次に本題に入っていきますが、配布資料に沿って説明させていただきます。昨年度既

に有識者会議で那須塩原駅周辺について議論した中で、今回はどういう話をしていくのかという疑問もあるのではないかと思います。そういうところも含めて那須塩原駅周辺の現状やこれまでの経緯について説明をしていきます。

配布資料のP1に今回の有識者会議でご議論頂きたい点をまとめておりますが、まず1つ目のポイントとしては、まちづくりビジョンを固めていくためのご意見を頂くことにあります。

2つ目は、昨年度からの状況変化についてです。昨年度は、那須塩原駅周辺の開発を考える際に、ブリヂストンの工場跡地 35ha の活用を前提として議論を進めておりましたが、状況変化により開発が断念されました。一方で、市庁舎はいずれ移転を行うことは確実ですので、市庁舎移転先の 3ha の土地を起爆剤にしつつ、速やかに駅周辺開発を進めていく必要があります。ここがご議論頂きたい大きなポイントとなります。

3つ目は、市民懇談会へのフィードバックになります。昨年度の有識者会議では先生方から市民からの意見を吸い上げる必要があるとのコメントを頂きましたが、今年度は有識者会議と並行して市民懇談会を開催しており、また市民に対するアンケートも実施しています。そこで示された意見に対して、より大所高所からご意見を頂きたいと思います。先生方からは長期的な観点、とりわけ 2050 年を目安におきながら、那須塩原駅周辺をどうしていくのかご意見を頂きたいと思います。

P3には、那須塩原駅周辺開発のこれまでの経過が記載されています。昭和 57 年に東北新幹線駅が開通し、昭和 62 年に駅前広場の整備が完了し、その後土地区画整理事業が行われました。その後、前々市長の時代に商業施設を意識した上でのイメージパースを作成しております。平成 27・28 年度には、那須塩原駅前にプロムナードを設けるなど駅前のシビックコアを中心としたイメージパースが作られています。

このように、那須塩原駅周辺の絵だけが描かれて具体的な検討が進まない状況が続きましたが、渡辺市長の就任後には有識者会議を開催し、まちづくりビジョンの方向性として6つの柱が提示されました。この時は前提として工場跡地の 35ha の開発が議論されていましたが、メガソーラーの開発や浸水リスクなどにより工場跡地の活用は断念することになりました。

その中で、今度起爆剤となるのは市庁舎移設となります。P5 に市庁舎移設に関する主な経過が記載されていますが、様々な議論が重ねられてきたものの移設の実現には至っておりません。合併特例債の発行可能期限をさらに延長し、じっくり考えていこうという意見があるとも聞いております。

以上が那須塩原駅周辺の経緯となりますが、黒磯駅前における開発について参考までにご説明します。黒磯駅の乗降客数が減少する中、平成 26 年に黒磯駅前及び周辺地域活性化懇談会が開催され、7つのコンセプトが取りまとめられました。ART369 プロジェクトの展

開、まちなか交流センターくるる、図書館みるるの開館、アーケードの屋根の撤去やカフェの新設などにより、街中の開発が進んでいます。

P8 からは令和2年以降における新型コロナによる社会変化について記載しています。冒頭の市長挨拶にもありましたが、軽井沢町、白浜町、新潟県などにおいてワーケーションの取り込みが積極的に進められています。最近は、エデュケーションをテーマにまちづくりを行う事例も出てきています。

P9 の世論調査を見ますと地方移住に関心が高まりつつあることが分かります。P10 は SMOUT の調査になりますが、首都圏を中心としたアンケートでは約4割が地方移住を検討しており、そのうち約1割が実際に移住を実施もしくは決定済と回答しています。地方移住への関心が高まっている中、移住先としては長野県が一人勝ちであるものの、全国の様々な自治体が移住先の候補として挙げられています。

P12 は東京都の月別転出入調査数の推移になりますが、東京都は令和2年の7月から9月にかけて3ヶ月連続で転出超過となっています。企業に目を向けると、テレワークやオフィス移転の動きが強まっています。パソナグループは淡路島に本社を移転し、その他の企業もニセコ町へ本社を移すなど、本社移転の動きが顕在化しています。

P15 は国政の動きについてですが、自民党では国会改革や首都機能移転についての意見が出てきています。私は本年5月に開催された「コロナを機に社会改革を目指す PT」のオンライン勉強会にて首都機能移転に関するプレゼンをさせて頂きました。本年11月には「社会機能移転分散型国づくり特命委員会」が立ち上げられ、自民党としての提言発出が検討されています。右下の画像は那須塩原市に関する首都機能移転論を書かせて頂いた記事となります。

また、最近の動きとして、本年11月15日に栃木県知事選にて福田知事が再選されましたが、福田知事のmanifestoに中央省庁の機能移転が書き込まれています。平成24年には那須塩原市は首都機能のバックアップ・キャンプ那須構想を出していますが、これはアメリカ大統領の別荘であるキャンプデービッドを意識しているもので、総理別邸や、各国の大使館別邸などの機能を那須塩原市に誘致しようという構想になっています。

P17 の図面は那須塩原駅周辺の公有地を掲載していますが、青い部分は那須塩原市が保有している土地となります。市庁舎の移設先予定地はスーパーブロックと呼ばれていますが、ここを起爆剤にしながら、那須塩原駅北側の広場などの市所有地を有効活用していく必要があります。

P19 以降はまちづくりビジョンの説明となりますが、まちづくりビジョンは昨年度の有識者会議の報告書をベースとしつつ、第2次那須塩原市総合計画と整合性を図りながら方向

性を固めていくこととなります。

昨年度の有識者会議の報告書では6つの柱を取りまとめましたが、今年度のまちづくりビジョンにおいては2点変更がございます。まず、工場跡地の活用の項目が無くなっており、その代わりに、(6)と(7)の項目が新たに追加されています。(6)の「高い将来性と可能性」については、まだ本格化している訳ではないですが、首都機能移転の流れや、ワーケーションなどを踏まえた将来の可能性について盛り込まれる予定です。また、市民懇談会などで議論頂く中で、(7)「市民参画の中でのテーマ」に新しいテーマを入れていきます。

令和2年度に取りまとめられたまちづくりビジョンをもとに、令和3年度にまちづくりビジョンロードマップを策定します。

P24からは第1回市民懇談会の結果概要を記載しています。市民懇談会での主な意見としては、那須塩原駅周辺の盛り上げについて肯定的な意見や、駅周辺に駐車場が多いため商店街に生まれ変わらせたいという意見、駅前にシンボリックなものが欲しいという意見、駅周辺での待ち時間を有効活用できるようにしたいという意見、2次交通を考えたロータリー整備を進めるべきなどの意見が出されています。

P28からは市民アンケート調査結果を掲載しています。15歳以上の那須塩原市民、市内県立高校の生徒に対してそれぞれアンケートを実施しています。まずは15歳以上の那須塩原市民へのアンケート結果ですが、那須塩原駅周辺に対してはにぎわいが少ない、落ち着いた感じであるとの回答が多くなっています。駅周辺には利用したい施設が少ないとの回答が多いものの、駅を降りた後の景観の素晴らしさには賛同する回答が多いです。犯罪の少なさや、道路整備の充実についても賛同する回答が多く出ています。駐車場は駅周辺の景観にとっては残念であるとの意見が聞かれるものの、アンケートでは半数近くが駅周辺の駐車場は充実して便利であると回答しています。那須塩原駅周辺が栃木県北の玄関口としてふさわしいかという質問に対しては「はい」が3割を切っています。高さ制限については現状程度の規制を維持する必要があると半数が回答しています。

P35からは、高校生のみに対する質問の結果概要となります。駅周辺に欲しい施設としては、自習スペースや、街歩きができるために周辺のお店が掲載された地図などの意見が出されています。

P37からは、市民と高校生の両方に聞いた質問となります。那須塩原駅周辺がどんなエリアになればいいかという質問に対しては、にぎわいや商業施設が必要という回答は市民と高校生の双方とも高い割合になっています。景観を生かすという意見は高校生よりも市民から高い回答割合が得られています。駅周辺に必要な施設については、市民と高校生双方ともカフェや百貨店の回答割合が高く、特に高校生は半数を超える回答割合となっています。駅周辺でのイベントの計画については、市民は自分でやるのは難しいと回答している割合が高いものの、高校生は計画したい、もしくはしてみたいとの回答割合が半数を超えています。

す。

P42 以降は参考までに 30 年後の未来予測に関する資料を掲載しています。リニア中央新線整備によるメガシティの形成、2050 年の那須塩原市の高齢化率予測、地縁から共通価値観に基づくコミュニティの展開、自動運転や MaaS による都市構造の変化、Society5.0 の進展などについて掲載しております。

以上、皆様にご議論頂きたい前提を当方にて整理させて頂きました。事務局から補足があれば宜しく申し上げます。

事務局：

アンケートについて補足ですが、高校生のアンケートの中で駅周辺にどのような機能が欲しいかという設問がありましたが、これは今年度那須塩原市と宇都宮大学とで共同研究の調査を行なっている中で、宇都宮大学の学生から提案があり特出しで設けたものとなります。よろしく申し上げます。

(意見交換)

朝比奈氏：

それでは、ここから意見交換に移りたいと思います。本日は東京都市大学特別教授の涌井先生がご欠席ですが、事前にコメントを頂いておりますので、簡単にご紹介致します。

- これまで真摯にまちづくりビジョンの検討を進められてきたことに敬意を評したい。特に高校生に対してアンケートを取られたことは、市民の積極的参加を得てまちづくりを自分事として考える機会を与える試みであり大いに評価できる。
- 市役所新庁舎は単なる行政事務を消化する従来機能にコミュニティ形成などの強化に資する市役所機能を加えていってはどうか。アオーレ長岡はその典型である。
- これからの自治体行政のあり方は宴会の名幹事役に似た姿である。市役所はお上の存在ではなく、地域のコミュニティのために民主導の多様なイベントを取りまとめるサービスの重要性を高めていくべき。
- それゆえ、新庁舎においてはただ箱を作るだけではなくて、自治体の仕組みを想像することが必要となる。
- 市民アンケートによれば適度な都市性を求めている姿が見て取れ、特に高校生にそのような希望が顕著に読み取れる。そのような可能性を訴求できる場所は市内においては那須塩原駅周辺以外にない。
- 新庁舎は市の中核ではあるものの多様な機能が同居する複雑な構造を構築するのがベ

スト。野外での「アート&クラフトマーケット」の開催、地域住民と観光客が日常的に交流する空間創出などによる地区形成が望まれる。ポートランドの「My People's Market」がその参考モデルとなる。

- 栃木県のゲートウェイ都市 那須塩原という目標は極めて戦略的である。しかしながら、中核となるコア施設や地区が不明瞭であるため、今回のプロジェクトではイメージの可視化と市民の内発性の喚起を行うべきである。

以上が涌井先生からのコメントとなります。それでは意見交換に入りたいと思いますので、先生方からのご意見を宜しくお願いします。

小場瀬氏：

全体的な概要を興味深く聞かせて頂きました。まず渡辺市長にお伺いしたいのですが、栃木県や茨城県の関係者と議論をしておりますと、いちごがなぜ納豆に負けるのかというのがもっぱらの話題となります。栃木県はとちおとめ、日光、御用邸、餃子などの観光資源があるのに、なぜ何もない茨城県に負けるのか。栃木県で断固これで推していこうという議論はあるのでしょうか？

渡辺市長：

先日の知事選挙の時の議論で知事の対抗馬の方がそのことを仰っていました。栃木県全体としてこれをやろうというものは特段ありません。那須塩原市は我々のブランドがあるので、全て那須塩原産の食材で作られた那須チーズフォンデュを作り、旧青木家那須別邸をライトアップしてそこで食べるなどのガストロノミーツーリズムを行っています。栃木県ではいちごを売り出していくということは多少ありますが、県全体としてそれほど強く打ち出している訳ではないです。

山島氏：

本日の議題の一つは30年後の未来ということですが、全体のビジョンについて意見させていただきます。まず初めに、先ほど小場瀬先生より出た意見に関してですが、栃木県内にいますと、宇都宮市など独自で動いているケースが多く、県と市の連携が上手く取れていないように感じます。県としては、宇都宮市、日光市、那須塩原市とそれぞれが頑張っているのに、それを県が上手くまとめきれていないなと思います。

まちづくりビジョンについて、30年後の将来と書かれており、内容的にもいいことが書かれているのですが、幾つか気になる点がございませぬ。数年後に実現しなければいけないことと、30年後に実現しなければいけないことが混在してしまっています。例えば市役所については、市役所の周りに人が集まるということが書かれていますが、これは新庁舎が完成してすぐに実現しなければならないことです。30年後を見据えるためにはキーワードが重

要になります。数年後に実現させるものとの区別をはっきりとさせる必要があります。

まちづくりは段階的に進めて行くものですが、キーワードの箇所は具体的にこう進めて行くということが書かれていると全体のビジョンが見えやすくなります。

加えて、ビジョンの3にて景観を全面に打ち出していますが、この点は昨年度の有識者会議や今回のアンケートでも前向きな意見が多く出されています。これに関して、遠くの山々や並木道などのキーワードが出ておりますが、那須塩原や栃木県北らしさを考えると、街並も併せて重要なキーワードになります。那須塩原駅を出た時に、遠くの山や並木が素晴らしい景観であっても、街並みの景観がどうなっているのかが非常に重要です。新庁舎が開設されて、駅周辺にそれなりの施設ができれば、人が集まって来て、更に色々な建物ができてきます。そうすると、それらの建物をどのようにコントロールしていくかがかなり重要になります。

街並みの景観のコントロールについては、例えば景観計画の中で緩いデザインを決めておくことも出来ます。また、那須塩原駅は天皇陛下が降りる場所なので風格のある街でなければならず、この風格をどう作っていくかも重要なテーマです。先ほどのアンケートの中では、百貨店が欲しいという意見も多く出ており、特に高校生からは商業施設が欲しいという意見が多く出されています。街に人が集まればそれに対応して色々な施設ができる訳ですから、市役所ができて、観光客向けの施設ができれば、当然そこで色々なイベントが開催されます。涌井先生のコメントにありましており、そこがコミュニティ形成の核となれば人が集まります。それをどう街にしていくかという観点を盛り込んで頂きたいと思います。

松岡氏：

最初の印象で言うと、目の前にあるものと先にあるものの段階的な計画は絶対に必要となります。30年後の2050年をビジョンにしているとのことですが、出来ることと出来ないことがあります。未来を担う高校生からアンケートを取ったことは素晴らしいと思いますが、それらの回答は全て納得できるものです。先ほど山島先生より街並みをどうするのかというお話がありましたが、人口も減っていく中で、那須塩原駅周辺で街並みが出来るような進展が可能なのかという心配がありますが、私は極端なことを言うと駅前を全部森で埋めてしまえという考えを持っています。森の中から点々と何かが見えていて、市役所が頭を覗かせているというのもいいかなと思います。

例えば駅の周辺は人が集まるということが重要で、那須塩原市を訪れた人がアンテナショップなどで那須塩原を感じることはもちろんのこと、そこからの2次交通がしっかりとあれば、温泉など色々な所へ行くことが出来ます。逆に市民の方にとっては、駅周辺に行くためにはそこに何か市民を引っ張るものがなければいけません。

昨年度の有識者会議で書かせて頂いた断面図ではデッキしか描いていません。デッキの上から雄大な自然を感じて、そこにアンテナショップ的なものがあったり、イベントをするスペースがあればいいなと思っていました。駅自体のデザインはそれほどがカッコいいも

のではないですが、駅前のデッキの上に建物を作ってしまったらどうかと考えます。そうすると駅を出た時に建物は感じませんが、デッキの上に何層か載せてそこに市民や若者が喜ぶようなものが売っている施設があり、そこに行けば何かが入るといったような機能があっても良いのではないのでしょうか。外から見た時に逆にそれが駅のシンボルとなります。絵に描かないと上手く伝わりませんが、デッキ全面が上物の施設で被さっている訳ではなく、ある一部分に階段上の建物が載っているようなイメージです。

昨年度の有識者会議で北山創造研究所の北山考雄さんがオブザーバーとして参加された際に、北山さんは那須塩原駅周辺には何もないと仰っていたものの、駅を出た時にみんなが広がるようなスペースがあると良いという感触を持たれていましたが、それはデッキ的なものではないかと感じました。きちんと駅周辺整備を進めていく時にはそれが中心になっていくのではないのでしょうか。商業施設は駅に来た人にはぱっとは見えませんが、実は上にあるというようなイメージが湧いています。

渡辺市長：

私も市民懇談会やアンケートの結果を見て納得するところが多いです。駅周辺に活気がなく、駐車場も多いと感じている人が多く、何とかしなければならぬとみんなが思っています。景観も多くの市民から重要とされています。一方で各論を見てみると、先ほど山島先生が仰ったとおり、百貨店などは他の駅周辺の真似事をしてもしようがないと考えています。駅周辺にはアンテナショップなどの那須塩原を体験できるゾーン、観光客と一般市民が交流できる場として産地直売所などがあればいいと思います。

本日の資料のP44では、各地に色々なものが点在している図が描かれていますが、私はこれが凄くいいと思っておりまして、一箇所にまとめて大きなビルを作るといったよりは、機能を点在させることで、郊外の市民は公民館などの施設で住民サービスを受けられるようになります。本庁舎として駅前に市役所を建てて、1階は那須塩原を体験できるゾーンとして、上手くいけば民間に全て貸し出してしまって、そこで世界ベスト10のチーズが売られていたり、マルシェが行われていけば、市民も観光客も利用します。全部の機能を1箇所に集約させる必要はありません。自然の景観を壊さないように、市役所だけが大きく構えているというよりは、テクノロジーを活用して機能分散を図れないかと考えています。

先生方から、もし新型コロナの影響を受けて、他の自治体での市役所や街づくりの優良事例をご存知でしたら教えて頂きたいです。私もイメージがだいぶ変わってきたというのが率直なところです。

小場瀬氏：

市役所は中核的なものを残しつつ機能のある種分散して、その代わりに自然を大いに残すという考え方は非常に素晴らしいです。磯崎新という世界的に有名な建築家がかつて「見えない都市」という本を出しました。見えない都市とは何だろうと、当時学生であった私は考

えましたが、要するに都市というのは、情報化が進んでいくと情報に重心がどんどんと載っかっていくもので、ハード自体はあまり意味を持たなくなってくるということを、磯崎さんは1960年代に言っていたのだと思います。それが2020年になって、いまオンラインで会議を行っているように、技術的にもその世界に十分対応ができる世の中になりました。

新しい考え方に基づいた市役所というのはまだ具体的には挙げられませんが、役所機能を分散し、公民館や図書館などの高度経済成長時に作られた施設を上手く活用し、人をおかずに管理をしていこうとしている自治体はあります。そういう点で言うと、役所＝建物という考え方がどうしても根付いていますが、それを違う概念で定義付けるのは30年後ではなく、比較的早く実現できるのではないのでしょうか。

また、オランダはいちごを日本の単位面積あたり8倍の生産量を生み出す能力を持っており、世界で2番目の農業輸出国となっています。日本は今まで関税で守られてきましたが、日本の米はグローバルコストに比べると7倍高いのですが、先日RCEP（東アジア地域包括的経済連携）が締結され、今後更にTPP（環太平洋パートナーシップ協定）が進展すれば、事実上関税ゼロという中で競争しなければいけない時代になるかもしれません。そうすると日本の農業も、国際的な競争が出来ないと生き残っていけない状況になります。そういう中で、農業の工業化みたいなことが当然起こらざるを得なくなります。もし那須塩原駅をどうにかしたいと考えるならば、駅の空間がすでにだいぶ余っていますので、あのようなところで最先端の農業を見せてあげて、そこで作ったものをその場で食べられるようにしてはどうでしょうか。1年に15回くらいは収穫できるようになります。

自治医大の駅前の横の土地で同様のことをやっているのを見にいきましたが、そこではトマトなどを生産していました。30年後を考えた時に、ワーケーションなども進むと思いますが、それと共に、栃木県全体として農業で十分儲かれば、人を集めることが出来るようになります。儲からないから子供達は東京へ行ってしまいます。ですから、これからは芸術的な農業ではなくて、ちゃんと世界の中で儲かる農業を本格的にやらないと、全く太刀打ち出来なくなります。役所としてもきちんと考えているという姿勢を示さなければなりません。

渡辺市長：

ちょうど東京で働きたくないと考えている人たちに対してどのような職を提供出来るか検討をしているところです。従来型の工場誘致では時間がかかってしまいますので、農地をいくらか集積してはどうかと考えています。那須塩原市は首都圏に近いのに米を生産しているのですが、そうではなくて野菜をたくさん作って、6次産業化までは難しくともカット野菜などの簡単な加工をすることで倍以上の値段にすることが出来ます。農地を市なり事業者が買い上げて、若い人たちに野菜を作って貰って、カット野菜を生産してはどうかと考えています。国内では国産の野菜が足りていないので、かなりその需要はあります。スマート農業のようにハイテクではないですが、集団農場に近い会社的な農業が出来ないかと考

えています。世界に勝負できるかどうかはまだ分かりませんが、まずは国内マーケットで勝てることを目指します。

また、先日 JR 東日本の本社を訪問したのですが、元副社長で現在ルミネ相談役をされている新井さんにお会いしました。日光市の出身なのですが、那須塩原市のことを非常に心配されていて、JR 東日本として大規模な投資は出来ないものの、市としてビジョンがあるならば、人を派遣させたいということを仰っていました。いきなりは難しいかもしれませんが、いずれ JR 東日本との連携も視野に入れたいと思っています。

山島氏：

先ほど市長から市役所機能を分散させていくという話がありましたが、もともと街のにぎわいというのは3密を作るところから始まっています。例えばアオーレ長岡においては、たくさんイベントが出来るようになっていきます。市役所は人が集まって色々なことが出来るということをこれまでやってきました。街というのは人が集まってにぎわいできないと街にはなりません。コロナはずっと続く訳ではないので、色々な機能が分散したとしても、市全体で何かをやるという時はあそこが起点になるというような共通理解があれば、みんなの愛着も湧きます。涌井先生が仰るように、コミュニティ機能を集約させ、駅周辺をそのヘソにするというような作り方をされると良いかと思います。

松岡氏：

今の山島先生のお話は全く同感です。コロナがあるから3密と言われていますが、本来は人が集まるコミュニティは大きなキーワードであり、コロナ後は、特に助け合う、連絡を取り合うという意味でより重要になります。

市庁舎がどうあるべきかという点については、市長が仰っていたように、分散型というのは十分に有り得る話です。やはりコアになる部分は絶対に必要で、それがあの駅前場所になります。市町村合併に対応したしっかりとした施設はまだ出来ていません。これまで市町村合併後に施設を無駄なく使うという観点から、既存の施設を有効活用することはありましたが、ここまでメガトレンドになっているデジタル化や ICT 化によって、リニア新幹線で移動しなくとも十分にコミュニケーションが取れるようになっていきます。そういう見えない技術が入ってきた上で、やはり大事なものは人であり、人が行き来する場所を作るためには市役所は普通の箱ではいけません。単体での建築という形はこれからどんどん無くなっていきます。これからは複合化、コンプレックス化という形で、色々な要素が入ってきた上で一つの建築となります。そうすると建築の名前も図書館なのか何なのか上手く呼べなくなります。愛称で呼ぶことになるかもしれません。

もう一方で、公共施設の重要性は増してきています。緊急時における司令機能や、緊急時に人が集まったり、公共施設空間の重要性は高まっています。新庁舎についてもあまり作り込まないで、フレームくらいのもので、長い年月の中で柔軟に対応していく形にするの

が良いのではないのでしょうか。新しく機能を付けたり外したりできるような形にして、その方が周りの自然とも調和して、コミュニティが生み出されるような空間ができます。そういう先進的なものを那須塩原市の新庁舎でやると、それだけで人が集まります。それが全体の景観や駅とも繋がっていくでしょう。

駅はどちらかというと商業的なものを集積して、新庁舎はイベントがあった時にお祭りのようなことがやれたり、そういう分け方をして、それが全体の景観として繋がっていくようなイメージを持つと良いのではないのでしょうか。

渡辺市長：

従来と違って市役所に行政機能を全て押し込める必要はないと思っています。余剰スペースに那須塩原を体験できるゾーンを作って、観光客が那須ブランドの品物を買えたり、市民がマルシェで買い物をしたり、イベントをしたりすることも出来ます。住民は近くの公民館で大方の手続きを行える仕組みが出来るのではないのでしょうか。

朝比奈氏：

今までの議論を整理しますと、皆様のご意見は大方一致しております。大きく分けると、一つ目には那須塩原駅周辺全体のあるべき姿を考えて、駅周辺をどうするのか、市役所をどうするのかについて様々な角度からご意見を頂きました。全体の雰囲気を見ると、山や緑、食や農業という話が出ておりましたが、これらが大きなシンボルであるというご意見がありました。駅前広場の土地は市役所が所有しておりますので、松岡先生からデッキの上の建物という話もありましたが、先ほどのシンボルの象徴としての活用が求められます。

その次に、スーパーブロックと呼ばれる土地で市役所をどう作っていくかですが、松岡先生から具体的なご意見があったように、コンプレックス化していく中で特定の形にするよりは、時代や周辺に合わせて切りはりしていくやり方が一つあります。

建築の世界ではよく代官山が事例として挙げられますが、いっぺんに開発するというよりは、徐々に開発を進めていくような方法があります。那須塩原市の場合は駅周辺の土地を全て持っている訳ではないので、新庁舎を起爆剤としながら進めていくこととなりますが、この辺りのご意見をお伺いしたと思います。

小場瀬氏：

松岡先生のイメージを聞いて思いつくのは名護市庁舎ですが、広場や各階にテラスがあって、大きなテラスは将来必要であれば部屋にすることができるなど、比較的フレキシビリティを持たせています。現実的には南国的すぎるという意見もあるようですが、一つのイメージとして、フレームだけ作っておいて、あとは時代に合わせて増改築を行なっていくというデザインは非常に良いと思います。ただ駅周辺の景観を考えると、新庁舎を作る時に、デザインコードのように建物についてこういうものに概ね沿って考えるべきという指針をき

ちゃんと作る必要があります。それこそ市民の人たちと練りながら徐々に決めてくということも出来るのではないのでしょうか。

それからもう一つ参考になるのは京都市で、かなり厳しいデザインコードを課していますが、役所から上から目線で言うのではなく、建てる方と議論を重ねてデザインを決めています。那須塩原市でも、市民参加により色々と議論をして貰ってもいいのではないのでしょうか。

山島氏：

那須塩原市は景観行政団体ですので、景観計画を策定できます。法律的に強制はできませんが、その中で色、形、高さなどのある程度制限をかけることは可能です。

景観の話については、京都市もそうですが、景観計画などいろいろな手法があり、どこまでどうガチガチに決めるかという問題になります。地域で集まってルールを決めるという方法もあります。那須塩原市の場合はガチガチにやっていくというよりは、変なものを建てさせないという方法が相応しいのではないのでしょうか。

朝比奈氏：

それでは最後に 30 年後の那須塩原市についてのご意見をお伺いします。

山島氏：

30 年後というと、確実に起こることと分からないことの 2 つがあります。人口減少や高齢化は確実に起こります。ICT や AI のテクノロジーも確実に進化していきます。思い出すと、インターネットは普及し始めてから 25 年経ち、スマホは 10 年も経っていません。30 年後と考えると、何がどうなるかは全く分かりません。自動運転は当たり前に出てきているでしょう。リモートワークも当たり前になって色々なところにオフィスが建ちます。そうすると、どういう街が栄えるかということ、魅力のある街というのが当然必要になります。那須塩原市では脱炭素も当然の流れになるかもしれませんが、30 年後には色々なことが変わっていきます。

街の魅力は一朝一夕にはできません。黒磯には、みるる、くるるがあり、Café Shozo があって、街全体の雰囲気を作られています。那須塩原駅周辺もそういう雰囲気を作っていかなければいけません。

小場瀬氏：

先ほど市長から耕作放棄地を上手く統合して活用するというお話がありましたが、将来的にロボットが人間と同じように働けるようになる時代が来るかもしれません。そうすると、土地を統合する必要が無くなるかもしれません。農家が関与する必要はありますが、実際の作業はロボットが行うということになります。ロボットが 1 台 100 万円、50 万円以下

になるような時代が来ると、広い土地で大規模農場をするという必要が無くなります。小規模な体制でも大規模に管理できる農業に変わっていくのではないのでしょうか。那須野が原は広大な土地があるので、将来的に酪農でいくのか、これまでとは異なる農業でいくのか見当はつきませんが、非常に土地を大きく使えるという点ではワールドワイドに勝っていける場所であると思います。それを駅前でシンボリックに表現してあげることが、情報発信の力として非常に重要です。

松岡氏：

30年後の予測は出来ませんが、絶対に変わらないものがあります。それは那須自身が持っている自然であり、これを守っていかなければいけません。人間の生活はどんどん変わっていきますが、あまりここに固執する必要はなく、その都度空間もそれに合わせて変わっていけば良いと思います。

那須塩原市に住んでいる人たちが30年後も自分の街を自慢できるようにするためにはどうしたらいいか。先ほど農業の話が出ておりましたが、地元ではこのような野菜を作っているだとか、このような場所があるだとかを発信すれば、それらを実際に観光客が来た時に肌で感じてもらうことが出来ます。凄く良いポテンシャルがあるのに今はそれらが上手く繋がっていないだけです。もっとスムーズにカッコよく繋げることを30年後の夢として描いています。

職住接近すると人が集まりますので、そのような場所がきちんと整備されていくことも重要なのではないのでしょうか。

朝比奈氏：

熱のこもったご議論ありがとうございました。那須全体の雰囲気はどう考えるか、そのシンボルとしての駅前のあり方、実際にすぐに着手できる場所としての新庁舎の機能、それらを包含するような30年後を想定してどう考えるかという話など、様々なご意見を頂きました。それでは、最後に市長より一言お願いします。

渡辺市長：

今日のご議論を聞いて新庁舎の展開が楽しみになりました。コロナ後の社会、駅周辺のあり方、新庁舎のあり方について更に考えていきたいと思います。今後も先生方とご議論頂けるとありがたいです、今日はどうもありがとうございました。

以上